

〔群小区画墓〕の終焉期（3）

—古墳と土壙墓—

渡 辺 修 一

目 次

1. 問題の所在	227
2. 古墳と土壙墓などがともに群集する遺跡	227
3. 方墳だけで群集する遺跡	232
4. 方墳と土壙墓の盛行年代	239
5. おわりに	242

1. 問題の所在

筆者は、印旛沼南岸の大規模な群集墳のひとつである物井古墳群を構成する古墳の調査及び整理に数年間携わってきた。物井古墳群の群構成の概要については、かつて述べたことがあるが、6世紀から8世紀にかけて築造された古墳群で、多くの支群によって構成され、その支群構成の変遷や中心的位置を占める支群などが判明しつつある⁽¹⁾。そのうち、物井古墳群の一角を占める御山遺跡について、最近報告書をまとめる機会を得た⁽²⁾。そこではまた7～8世紀の古墳群を考えるうえで重要な成果が得られていた。

御山遺跡において検出された古墳群のなかで、御山B II支群（8世紀に築造されたと考えられる方墳によって構成される支群のひとつ）としたグループには、方墳だけではなく土壌墓も含まれていた。SK-034、SK-038、SK-039がそれである。位置的に見れば、SK-034とSX-026、SX-031の関係、SK-038、SK-039とSX-028以下方墳群との関係、つまり同時期に並行して営まれたと考えられる方墳と土壌墓の関係が注目されるのである。また、こういった形で古墳群のなかに区画（周溝、墳丘）を持つ墓と持たない墓と一緒に群集する遺跡がある一方で、多数の小方墳が面的に調査されながら、同時期あるいはごく接近した時期と思われる土壌墓などがまったく検出されない遺跡もある。筆者は、奈良時代以降の方墳と土壌墓、火葬墓が群集した遺跡である千葉市荒久遺跡を報告した際、上記のような遺跡間の墳墓群構成の違いを指摘したことがある⁽³⁾。該期の墳墓群の場合、それぞれの遺構の時期を知ることができないものが多く、分析の手段がきわめて乏しいためもあって、そこではまったく考察を加えることをしなかった。ここでは千葉県内の代表的な遺跡をいくつか比較することによって、該期の墳墓群をめぐる問題点を若干考えてみたい。

2. 古墳と土壌墓などがともに群集する遺跡

御山遺跡と同じように古墳と土壌墓が群集した墓域が調査されている遺跡には、佐倉市立山遺跡⁽⁴⁾、同市明代台遺跡⁽⁵⁾、同市大作遺跡⁽⁶⁾、同市栗野 I 遺跡⁽⁷⁾といった岩富古墳群に含まれる各遺跡、千葉市荒久遺跡⁽⁸⁾、同市地藏山遺跡⁽⁹⁾、田中新史によって紹介されている市原市西谷（北）古墳群⁽¹⁰⁾などがある。とくに岩富古墳群に含まれる遺跡群には大量の資料が蓄積されている。ではまずそれらの群構成を遺跡ごとに概観してみたい。

岩富古墳群では、きわめて多数の古墳、土壌墓が佐倉第三工業団地造成に伴って調査されている。その分布は第1図に示した。そのなかで池向遺跡として調査された多くの古墳が現在未報告であるので、岩富古墳群の形成過程については十分な把握はされないが、概略はおおよそ次



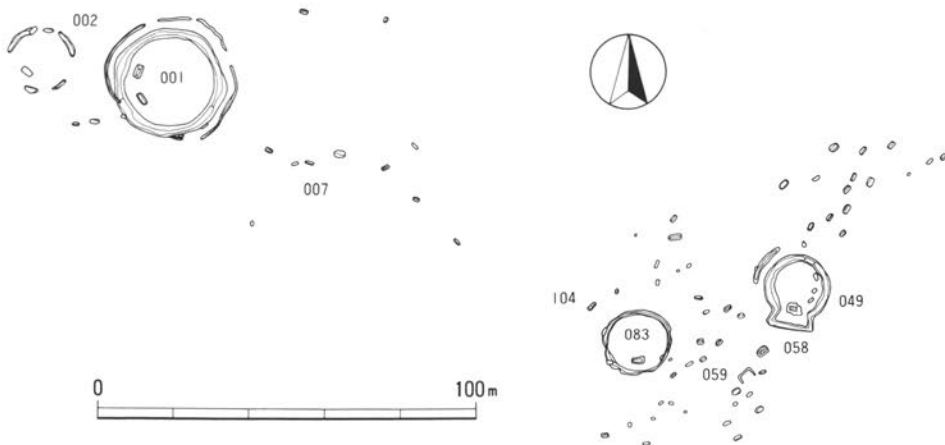
第1図 岩富古墳群(佐倉第三工業団地内)略図(1/10,000)
(山口・他1992より改図転載)

のように理解されよう。

岩富古墳群では、帆立貝形古墳を含む大小の円墳が松向作遺跡から大作遺跡、池向遺跡にかけてほとんど切れ目なく築かれている。もし分けるとすれば、松向作遺跡から立山遺跡にかけてのグループ、大作遺跡から向原遺跡にかけてのグループ、そして池向遺跡のグループを考えることができようか。また向原遺跡の南端の小規模な円墳群が比較的独立的である。周辺には星谷津遺跡や向山谷津遺跡などに独立的な小円墳があるほか、栗野I遺跡に帆立貝形古墳1基

を含む4基が認められる。一方方墳群は円墳群ほど連綿とした分布を示さない。まとまった分布を示すのは、立山遺跡のグループ、大作遺跡南寄りのグループ、向原遺跡南縁のグループ、池向遺跡北端のグループ、池向遺跡南寄りのグループがある。ほかは1～3基の小群で、なかでは明代台遺跡のまとまりが注目される。帆立貝形古墳、円墳、方墳のほかには区画を伴わない土壌墓（木棺墓を含む）が多数調査されている点は当古墳群の特色である。とくに目立つのは栗野I遺跡で、非常に多数の土壌墓が円墳群の周囲に営まれている。また松向作・立山遺跡、大作遺跡、明代台遺跡にもややまとまった一群がある。以上のような分布を示す岩富古墳群で最も古い古墳は5世紀末の大作1号墳と大作2号墳とされているが、全体的に見て6世紀代を中心とする円墳群は松向作・立山遺跡の北半、大作遺跡、向原遺跡に集中的に築かれているようである。7世紀代の墓域については立山遺跡の南寄り、栗野I遺跡にあり、そして優位性のある大きなグループが池向遺跡に所在するようである。子細はともかく、6世紀代中心の墓域から7世紀代の墓域へ移動する点、7世紀代には優位にあるグループが目立ってくる点などは物井古墳群の構造によく似ている。岩富古墳群で検出されている方墳のほとんどは小規模なもので、8世紀初頭までに築かれたと思われる方墳は少ない。しかし土壌墓群について見れば、栗野I遺跡は別として方墳群の分布と重複する傾向があるが、そのいずれも8世紀初頭前後に築かれたと思われる方墳を含んでいる。

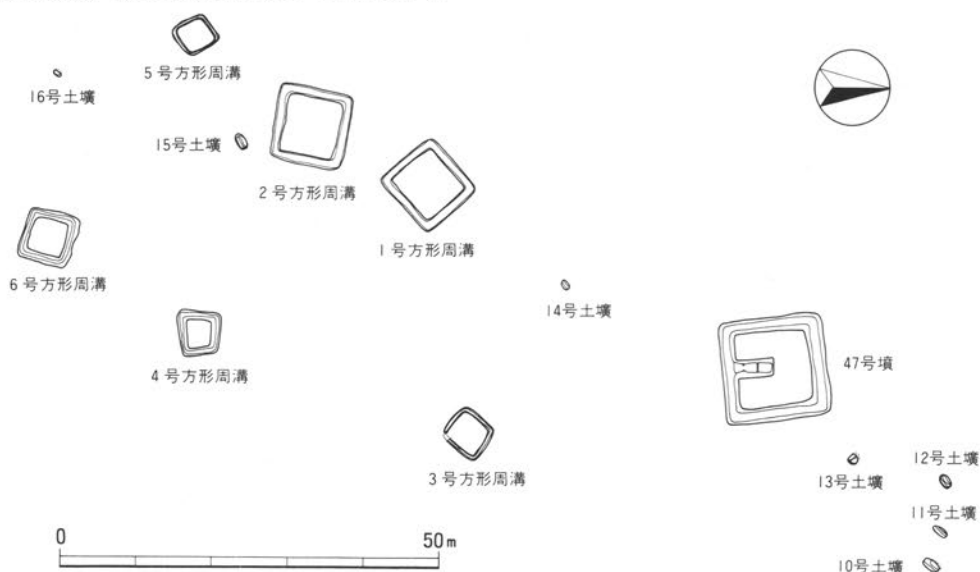
栗野I遺跡 まず着目したいのが栗野I遺跡の土壌墓群である。栗野I遺跡では西寄りに二重周溝を持つ円墳001とやや規模の小さい円墳002が、東寄りには二重周溝を持つ帆立貝形古墳049と円墳083が分布し、その東西の二群に対応するように有天井土壌墓⁽¹¹⁾を主体とする土壌墓群が東西に分かれて分布する。土壌墓群の内訳は、木棺墓（報告書の分類によるA類）3基、有溝土壌墓（B類）2基、有天井土壌墓（C類）55基である。それらの築造年代を知る手掛か



第2図 佐倉市栗野I遺跡(1/2,000) (山口・他1991)

りは乏しいが、円墳001周溝から7世紀第3四半期の須恵器が、帆立貝形古墳049周溝から7世紀第4四半期の須恵器が、土壙墓007から7世紀末から8世紀初頭の須恵器が出土した。報告者は帆立貝形古墳049を6世紀末の築造と位置づけているが、そう考える積極的な根拠はなく、当遺跡の古墳群は7世紀中葉に造られ、副次的な埋葬施設を含む葬送行為が7世紀末あるいは8世紀初頭まで続いたと見たい。周辺の土壙墓群については、年代が推定できるものが1例しかないものの、その分布からは古墳と無関係とは到底考えられず、古墳の追葬あるいは副次的埋葬施設が造られた期間からその後しばらくの時間幅を考え、7世紀後葉から8世紀前葉と見たい。この時期は、物井古墳群でも見たように新たな古墳の築造が限定される時期であり、その間に土壙墓が爆発的に営まれているとすれば、非常に興味深い現象であると言える。

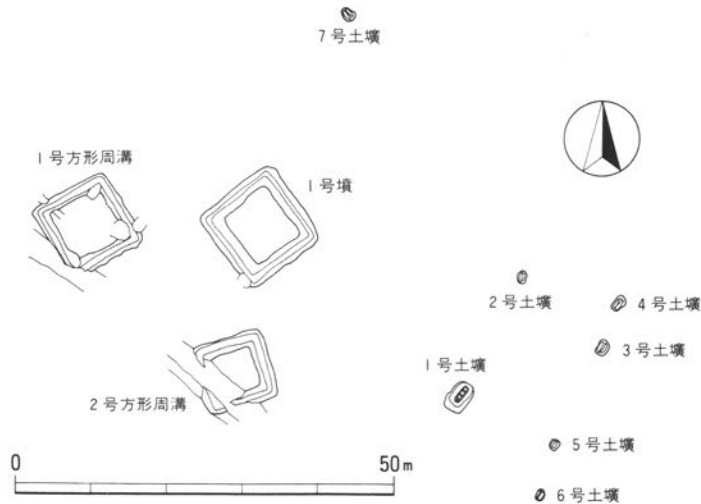
松向作・立山遺跡 松向作遺跡⁽¹²⁾及び立山遺跡(一連の遺跡とすることができる)に展開する墓域では、南部に大作28号墳を含む「変則的古墳」が集中し、当遺跡の円墳群のなかでは新しい一群と考えることができる。そしてそれらと遺跡北部(松向作遺跡)の円墳群との間に多数の方墳群が営まれている。方墳群のなかで最大の松向作060は横穴式石室を埋葬施設に持ち、8世紀第1四半期の土器群を出土した。土壙墓群は方墳群とほぼ重なった分布を示し、6基の有溝土壙墓と6基の有天井土壙墓がある。他の土壙墓群では限られた存在である有溝土壙墓が目立って多いことは注目してよいか。それらのうちでは1基の有溝土壙墓から常総型甕が出土しているが、細かい時期比定は不可能で、8世紀代(～9世紀代)という漠然とした編年観にとどまる。ただ方墳群と土壙墓群が並行して営まれたことは確実と思われる。またここでは特定の墳墓形態が特定の分布を示すことはない。



第3図 佐倉市大作遺跡(部分1/1,000) (藤崎・他1990)

大作遺跡 大作遺跡ではその南部に方墳8基、土壙墓7基（時期が溯る可能性が強い9号土壙を除く）が分布する。方墳のうち、46号墳と47号墳が横穴式石室と報告された埋葬施設を持ち、46号墳はやや西方に離れていた。それらの埋葬施設は御山遺跡SX-047と類似の横穴式木室である可能性もあろう。時期が判別できる土器を出土した遺構には46号墳、6号方形周溝、10号土壙がある。土器は8世紀第2四半期～第3四半期の所産で、なかでは6号方形周溝出土土器がやや降るかと思われる。いずれにせよ方墳群と土壙墓群は並行して営まれていたことは確実である。土壙墓はいずれも有天井土壙墓で、10号土壙、11号土壙、12号土壙、13号土壙の4基が47号墳の北東に集中する点が注目される。また土壙墓はほとんどが埋葬部を北西側に設けているのに対し、47号墳に最も接近した13号土壙のみ埋葬部を南西に向ける。つまり搬入方向は47号墳に正対し、両者の密接な関係が窺われる。したがって少なくとも13号土壙は、そしておそらく10号土壙以下の4基は、当遺跡最大の（中心的な）方墳である47号墳築造後、それを意識して営まれたものと考えられる。他の3基の土壙墓は方墳群の間に分散的に営まれており、松向作・立山遺跡と同様の状況と言える。当遺跡では有溝土壙墓がまったく認められないが、土壙墓間では有溝土壙墓が上位の、有天井土壙墓が下位の埋葬主体であるはずで、当遺跡と松向作・立山遺跡との様相差は重視されなければならない。

明代台遺跡 明代台遺跡は、栗野I・II遺跡から松向作・立山遺跡、大作遺跡、向原遺跡、そして池向遺跡へと続く台地とは谷を隔てて西側の台地上に位置し、対岸は向原遺跡である。この連続した台地上には、北から腰巻遺跡、向山谷津遺跡、明代台遺跡、木戸場遺跡などが所在し、小方墳が点在しているが、うち明代台遺跡B地点では方墳3基と土壙墓7基がまとまって調査されている。ここでは方墳群と土壙墓群の分布が明瞭に分かれる点が特徴的である。3基の方墳では、いずれも周溝内から須恵器が出土しており、それらが示す年代は、1号墳が8世紀第1四半期、1号方形周溝もやはり8世紀第1四半期、2号方形周溝についてはおそらく8世紀第3四半期が想定される。当遺跡はその東部が調査対象になっただけであり、未調査部分も多いが、B地点の墓域はこれ以上広がらないようである。ただ出土土器からみる限り、1号墳および1号方形周溝と2号方形周溝の間に半世紀程度の時間差があるのが気になる点ではある。他方土壙墓群については台地東縁に3号土壙、4号土壙、5号土壙、6号土壙が一線に並び、その内側、方墳群寄りに1号土壙、2号土壙が並ぶ。7号土壙のみ方墳群の北側に位置する。それらのうち1号土壙が有溝土壙墓で、他は有天井土壙墓である。有天井土壙墓の埋葬部は2号～6号土壙が北西側、7号土壙が南西側で、すべて搬入方向が方墳群側に向いていることになる。またここでもう一つ注目すべき点は、3号土壙と4号土壙、5号土壙と6号土壙それぞれが2基ずつのグループを形成していると見られることである。土壙墓群の出土遺物は乏しいが、1号土壙と3号土壙から8世紀前半に比定される土師器坏が出土している。ともに



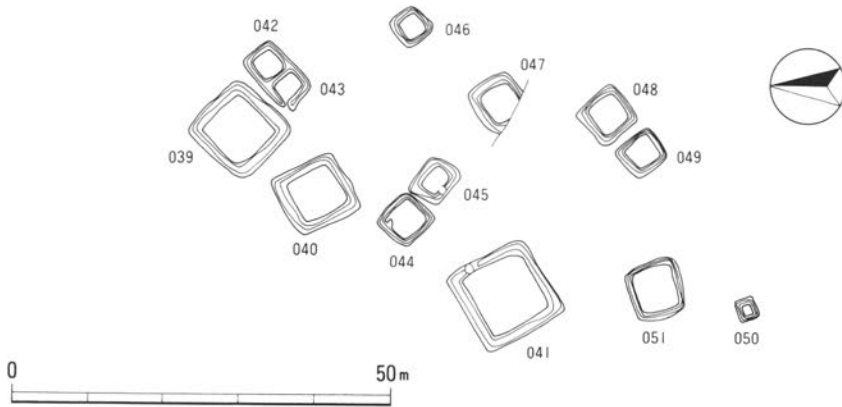
第4図 佐倉市明代台遺跡(1/1,000) (矢戸・他1987)

単体出土のため時期比定には慎重にならざるをえないが、敢えて言えば1号土墳出土土器が古く8世紀初頭前後、3号土墳出土土器が8世紀第2四半期か。上記のことから、当遺跡でも方墳群と土壇墓群が並行して営まれていたことは確実と言え、全体として一つの墓域を形成しながら、方墳群と土壇墓群が場所を異にしていたことは注目すべき事象と言わねばなるまい。

これまで見てきた以外で、岩富古墳群中の方墳を主体とした墓域に土壇墓群が伴うことはほとんどない。先にまとまった方墳群として挙げたうち、向原遺跡南縁のグループ⁽¹³⁾には土壇墓群が伴わないし、池向遺跡北側のグループにはわずか1基、池向遺跡南側のグループには2基の有天井土壇墓が認められただけである。逆に池向遺跡に隣接する星谷津遺跡⁽¹⁴⁾や、栗野II遺跡⁽¹⁵⁾、向山谷津遺跡⁽¹⁶⁾では2～3基の有天井土壇墓がまとまって分布する。時期比定の手掛かりとなる土器を出土した遺構は3基がある。向原遺跡2号方形周溝からは8世紀第3四半期に位置づけられる須恵器が、星谷津遺跡土壇墓015と土壇墓030からは8世紀第1四半期の須恵器が出土した。さらに池向遺跡の調査成果の公表が待ち望まれるが、以上に述べてきたような岩富古墳群の良好な資料は、該期の墳墓群を考える上で非常に示唆に富んでいる。

3. 方墳だけで群集する遺跡

以前、『千葉市荒久遺跡(3)』の補論で、土壇墓群を伴う遺跡が下総に多いと述べたが、必ずしもそうとは言えず、上総でも市原市西谷(北)古墳群の例があり、下総では岩富古墳群が突出しているにすぎない。物井古墳群や岩富古墳群が分布する印旛沼南岸地域でも、方墳だけで群集する遺跡が多い。

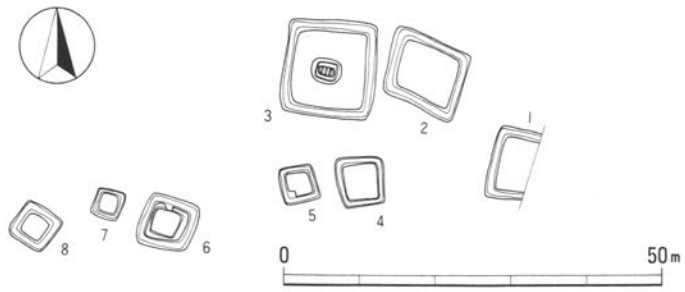


第5図 四街道市中山遺跡(1/1,000) (荒井・他1987)

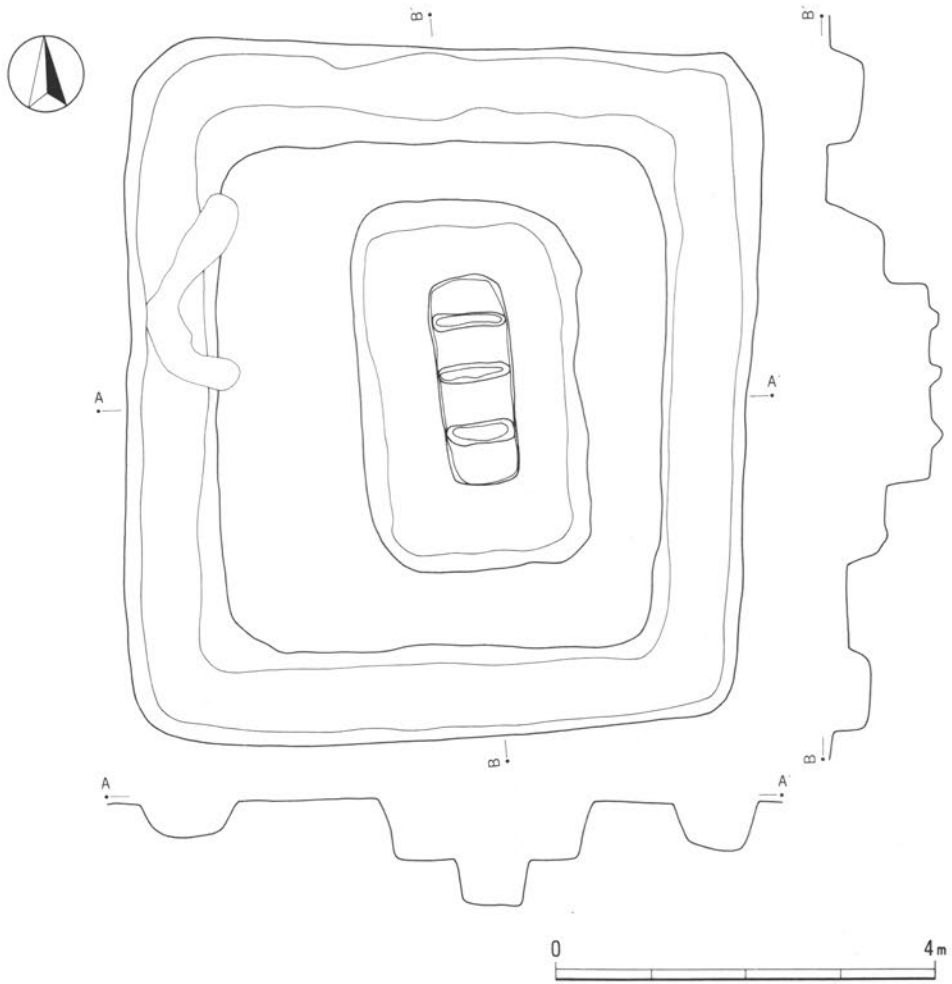
中山遺跡 四街道市中山遺跡⁽¹⁷⁾は13基の方墳が密集して築かれていた遺跡である。周辺には該期の土墳墓等はまったく検出されていない。方墳群の分布では、まず042と043が一辺の溝を共有しているのが注目され、さらに044と045、048と049が接続するようにして営まれている。このように小規模な方墳は2基が一グループを形成するようであるが、比較的大規模なものでも例えば039と040をグルーピングすることは不可能ではないかもしれない。明確に埋葬施設として調査された例はないが、いくつかの方墳に土壌状の落ち込みが検出され、とくに039には火葬骨を納めた墓壇かと思われる施設が認められた。全体に遺物は乏しく、040と048から土器が出土したにすぎない。040では方台部土壌と周溝内から土器が出土したが、それらには8世紀第3四半期頃の年代を与えることができ、また048周溝内から出土した土器は、小片のため明断できないが、やはり8世紀後半のものと思われる。

生谷遺跡A地点 佐倉市生谷遺跡A地点⁽¹⁸⁾も方墳群が密集する遺跡で、8基の方墳が調査されている。中山遺跡でもそうであったが、方墳間の規模の差が大きい。また中山遺跡と同様に4号周溝と5号周溝、6号周溝と7号周溝、あるいは2号周溝と3号周溝がそれぞれグルーピングされるかもしれない。埋葬施設としては、3号周溝方台部中央に有溝土壇が設けられている。なおこの3号周溝からはやはり8世紀後半代と考えられる須恵器が出土している。

他に該期の方墳の埋葬施設として有溝土壇が営まれる例としては、第7図に示した四街道市羽根戸遺跡⁽¹⁹⁾がある。羽根戸遺跡の方墳は生谷遺跡A地点3号周溝より規模が小さく、また同時期の墳墓が周辺から検出されておらず、独立的な存在である。生谷遺跡の場合は、3号周溝が最大規模であり、中心的な存在になっている。群中で中心的な古墳の中心的埋葬施設として有溝土壇(木棺)墓が採用されていることになり、この事実は土墳墓群中の有溝土壇墓と有天井土壇墓の関係に示唆を与える。関連資料として千葉市兼坂遺跡⁽²⁰⁾も興味深い。兼坂遺跡で調査された3基の方墳のうち、1号周溝及び2号周溝の方台部には二段の掘り込みを有する土壇



第6図 佐倉市生谷遺跡A地点(1/1,000) (田川・他1977)



第7図 四街道市羽根戸遺跡検出方墳(1/80)
(千田・大賀1986より改図転載)

が設けられており、木棺部底面の溝が認められないものの有溝土壇と同等のものとしてよいであろう。そしてその2基の方墳の周溝内には、有天井土壇が従属的な埋葬施設として設けられていた。先に触れた土壇墓群中の埋葬主体の格差はこのような例から想定されるものである。

次に上総地域の遺跡の例を見てみよう。上総地域で該期の方墳群がまとめて検出された遺跡としては、「国分寺台」遺跡群、武士遺跡⁽²¹⁾、下鈴野遺跡⁽²²⁾、外迎山遺跡⁽²³⁾、奉免上原台遺跡⁽²⁴⁾など市原市内の遺跡に多い。それらのうち報告書が刊行された遺跡には下鈴野遺跡、外迎山遺跡があるが、武士遺跡についても概要が報告されている。それらのうち、大きな群集規模を持つ武士遺跡と外迎山遺跡について概観したい。

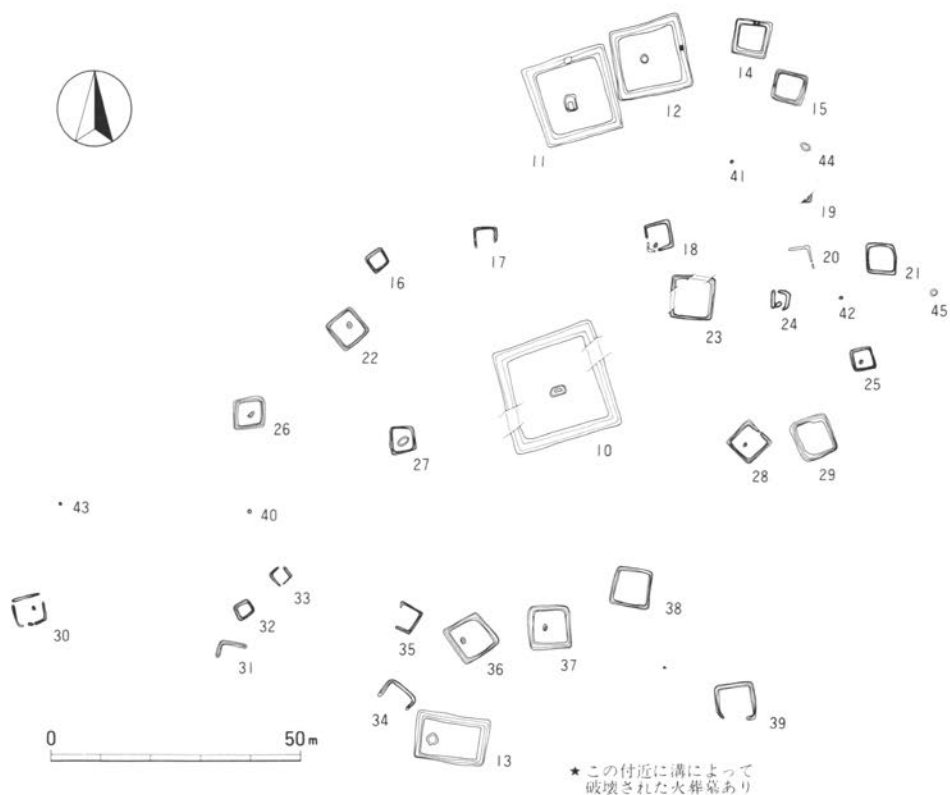
武士遺跡 市原市武士遺跡については現在未報告であるが、神野信及び笹生衛によって概要が紹介されている。ここでは7世紀後葉以降の方墳40基が調査されたほか、単独の地下式横穴1基と石櫃1基が検出された。方墳は、周溝内縁長17m近いものから3m台のものまで大小の差が著しいが、大規模で方台部に木棺直葬土壇を持つSC-21とSC-34の2基が最も古く、



第8図 市原市武士遺跡(1/2,000) (神野・笹生1990)

7世紀第3～4四半期が想定されている。それに次ぐ年代が想定されるのは、地下式横穴を埋葬施設に持つSC-29で、8世紀第2四半期頃の須恵器が出土している。続いてSC-10、SC-27、SC-35、SC-37の4基からは8世紀後半～9世紀初頭の土器が出土しており、この時期の築造数が多いことを窺わせる。また最も新しい段階の遺物を出土したものにSC-07とSC-18の2基があり、9世紀第2四半期が想定されている。これらはかなり規模が小さいほうに属する。このように武士遺跡の方墳群はかなり長期間にわたって造墓活動が続けられた結果と考えられるが、その間にはたして断絶がなかったかどうかは難しい問題である。また原則として土壙墓群は伴わないと考えてよい。なお当遺跡では、埋葬施設として地下式横穴が単独のものを含めて7基、石櫃が単独のものを含めて11基と多用されているが、これは上総の特色である。ただ石櫃が広い分布域を持つのに対し、地下式横穴は市原市域にほぼ限られるという相違点がある。武士遺跡では地下式横穴は8世紀前半から採用されているようであるが、石櫃の年代は残念ながら判らない。SC-21に営まれた2基の石櫃は当初の築造年代より降るものであろう。

外迎山遺跡 市原市外迎山遺跡では30基の方墳と4基の火葬墓、土壙墓と考えられる遺構2

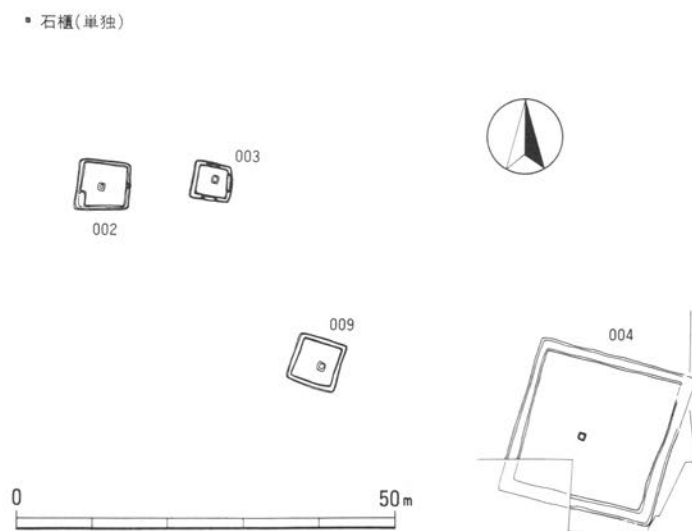


第9図 市原市外迎山遺跡(1/1,500) (木對1987)

基が調査されている。武士遺跡と同様に、方墳の規模には大小の差が顕著である。方墳のうち10号遺構、11号遺構については木棺直葬土壌を埋葬施設として設けているが、これらは最も規模が大きい。10号遺構からは、可能性としては7世紀末から、おそらく8世紀初頭の土器群が出土している。方墳群のなかで他に土器を出土したものには11号、12号、13号、27号、29号遺構がある。11号～27号遺構の場合、8世紀代の所産と思われるが細かい時期比定が困難な遺物であり、29号遺構から出土した須恵器のみ8世紀第1四半期に比定されるものであろう。10号遺構出土土器と29号遺構出土土器の比較では10号遺構のそれが先行すると思われ、当遺跡でも最大規模の古墳が他に先行して築かれている可能性は強い。古墳の埋葬施設としては、先述のとおり10号、11号遺構は木棺直葬を中心的埋葬とし、11号遺構には周溝内にも土壌状施設が認められた。また12号、13号遺構は火葬骨埋納施設と思われる土壌が検出されている。他の古墳についても、明確に埋葬施設と断じきれものではないものの、土壌状の落ち込みが検出されている。地下式横穴や石櫃は認められない。区画を持たない墳墓としては火葬墓があるが、うち40号遺構から出土した土器は9世紀前半の年代が想定されるものであった。また41～43号遺構からも土器が出土しているが、いずれも甕で細かい年代比定が困難である。しかしながら40号遺構と大きく離れた時期ではないと思われる。火葬墓以外には有天井土壙墓として報告されている44号遺構があり、ここからも土器が出土している。時期比定は難しいが、おそらく8世紀初頭前後、つまり方墳群の築造が開始された頃の所産と思われる。当遺跡全体の構成は、採用された埋葬施設の相違はあっても先に見た武士遺跡と類似しており、基本的に土壌墓群は伴わず、新しい段階になって単独の火葬施設が造られていったと考えられる。ただ唯一検出された土壙墓がもし8世紀初頭に営まれたものであるなら、その点は留意されるべきであろう。

以上2遺跡はいずれも大きな群集規模を持つ遺跡であったが、7世紀後半～8世紀初頭に造墓活動が開始され、9世紀前半までそれが続いていた。両者とも原則的に方墳だけが群集する在り方で、9世紀になって区画を持たない墳墓が築かれる傾向が窺われた。ここでさらに2遺跡ほど見てみよう。

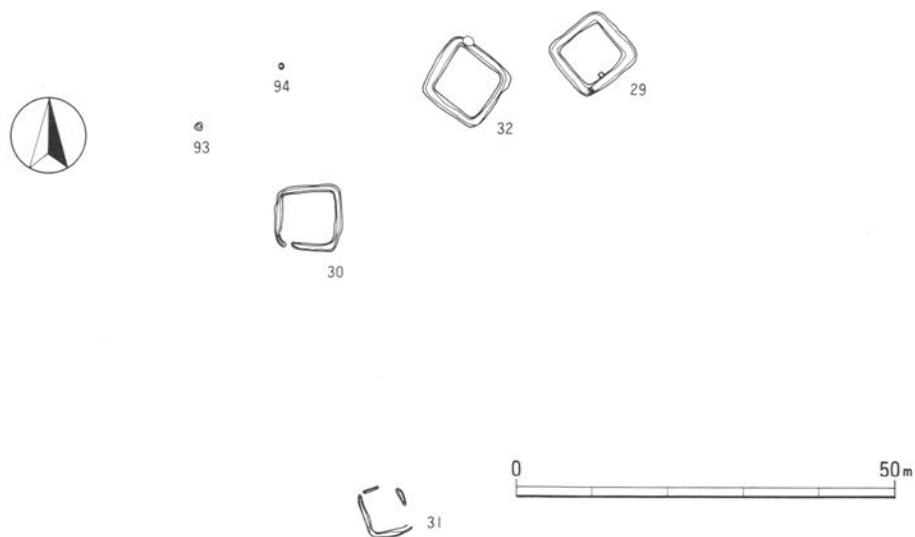
打越岱遺跡 袖ヶ浦市打越岱遺跡⁽²⁵⁾は4基の方墳が調査された遺跡である。調査範囲が限定されているため、群の全貌が捉えられたとは言い難いが、あまり多数の古墳が群集していないかもしれない。調査範囲の南東寄りにある004号址は群を抜いて大規模なもので、周溝内縁長17～18mを測る。埋葬施設として方台部の中央寄りに方形土壌があり、火葬骨が検出されている。004号址の北西には002号址、003号址、009号址の3基の小規模方墳が並び、いずれにも火葬骨埋納施設である方形土壌が検出されている。また002号址周溝内に石櫃が、009号址の三方の周溝内に骨粉が検出された土壌があり、従属的埋葬施設と考えられる。各古墳の時期比定は難しいが、004号址からは8世紀前半の須恵器が、002号址と003号址からは8世紀中葉以降の須恵器が出土



第10図 袖ヶ浦市打越岱遺跡(1/1,000) (小澤・他1989)

している。おそらく最大の004号址が先行して築かれ、他の小方墳が続いて造られる。方墳群の北西方にはさらに単独の石櫃1基が造られているが、勿論時期は判らず、方墳群との前後関係は不明である。

土持台遺跡 下総ではあるが、東上総に近接した例として多古町土持台遺跡⁽²⁶⁾を挙げる。ここでも方墳4基が調査されているが、周溝内縁長5～7mのもので構成され、打越岱遺跡のような規模の大小は認められない。埋葬施設が検出されたのは29号跡1基のみで、中心的埋葬施



第11図 多古町土持台遺跡(1/1,000) (三浦1986)

設として地下式横穴が、副次的な埋葬施設として石櫃が営まれている。4基の方墳のうち29号跡、32号跡の2基から時期比定の可能な土器が出土しているが、年代的には32号跡出土土器が古く、8世紀前半（報文では第2四半期としている）に位置づけられ、29号跡出土土器は8世紀第3四半期に位置づけられる。方墳群の北西側には火葬墓93号跡、94号跡が、北にかなり離れて火葬墓95号跡が、営まれていた。蔵骨器となった土器からの判断では方墳群出土土器より新しいものであることは確実である。報文では、94号跡が8世紀第4四半期、95号跡が9世紀第1四半期、93号跡が9世紀第2四半期とされている。それに大きな誤りはないであろうものの、土師器甕及び短頸壺であるので細かい時期比定は困難である。いずれにしてもこの遺跡では、8世紀前半のやや降った時点から8世紀の後半にかけて方墳が築造され、方墳築造終了後、区画を持たない火葬墓が造られたと考えられる。

4. 方墳と土壙墓の盛行年代

これまで、7世紀末前後からの方墳群などが調査された千葉県内のいくつかの遺跡の群構成を通観してきた。ここでその結果を年代を追ってまとめてみたい。

土壙墓の盛行 下総の代表的な古墳群として採りあげた岩富古墳群では、古い段階の例として栗野I遺跡がある。ここでは7世紀代の古墳の周囲に爆発的に土壙墓群が営まれていたが、それらは7世紀末から8世紀初頭に位置づけられた。現在のところ、この土壙墓群に匹敵する遺跡は下総にはなく、上総では田中新司が紹介した西谷（北）古墳群と基数はやや少ないが諏訪台古墳群⁽²⁷⁾がある。西谷（北）古墳群では6世紀から7世紀後半の古墳の間に多数の土壙墓が分布するが、6世紀の古墳に関係すると思われる土壙墓もあって、かなり長期間造り続けられているようである。7世紀後半に築かれた方墳は4基あり、8世紀初頭までには築造は終了したとされる。おそらくその間も有天井土壙墓を中心として土壙墓は造られ続けていると思われる。8世紀以降の方墳が築かれている諏訪台古墳群の様相が充分公表されていないため判らないが、一般的には、8世紀以後の古墳群にこれほどの土壙墓群が伴うことはない。

岩富古墳群では、8世紀前半（推定も含める）の古墳が築かれている支群に松向作・立山遺跡、大作遺跡、明代台遺跡があったが、それらの遺跡では必ず土壙墓群が伴っていた。しかし向原遺跡の方墳群では土壙墓群は伴っていなかった。向原遺跡の2号方形周溝は前述のように8世紀第3四半期の土器を出土しており、そのことから8世紀後半に築かれた方墳群に土壙墓群が伴わないという仮定ができる。また方墳だけで群集する遺跡として中山遺跡、生谷遺跡A地点を例示したが、いずれからも少量ながら8世紀後半代の土器が出土しており、その仮定を補強する。ここで例示しなかったが、方墳だけで群集する遺跡として著名な千葉市鈴子（菅田

県立コロニー内) 遺跡⁽²⁸⁾とそれに隣接する同市辺田山谷遺跡⁽²⁹⁾についても、いくつかの古墳から出土した土器は8世紀後半代のものである。個々の古墳で時期が比定できるものが限られてはいるが、全体としては上記の傾向性はかなり明瞭であると言える。

7世紀末葉から8世紀前半にかけては、新たな古墳の造営はかなり限定される傾向にある。これは物井古墳群においてははっきりと指摘できるし、岩富古墳群においてもその段階の古墳は多くはあるまい。少なくとも下総では、その段階に土壙墓が盛行することになる。もし古墳の造営が限定されていることが正しいとしたら、一概に6世紀から7世紀代の古墳で従属的な位置にあった埋葬が、古墳外に営まれるようになったとは言えない。勿論そのような傾向は皆無ではないが、むしろ古墳（区画墓）を営んでいた階層の一部が区画のない土壙墓を営むようになったと評価すべきではないだろうか。さらにこの現象が、律令国家成立前後に起きていることは重要である。つまり当地域において、律令支配が浸透していく過程のなか、階層秩序に変化が生じたことになる。ここで古墳築造の「限定」が、複数の支群（小集団）単位で起きているのか、それとも古墳群（大集団）総体として起きたことなのかは大きな問題である。この問題については物井古墳群の中核部分の過半が未調査であり、岩富古墳群池向遺跡が未報告である現状では明確にしない。

上総の遺跡として例示した武士遺跡、外迎山遺跡では7世紀後半から8世紀初頭の時点で造墓活動が開始されているが、両遺跡ともに土壙墓群を伴わない。外迎山遺跡で8世紀初頭かと思われる有天井土壙墓が1基あるが、それを過大評価することはできない。また区画を持たない火葬墓が群中に含まれるが、それらは方墳築造の最終段階または終了後に造られている可能性があるものである。したがって岩富古墳群や「国分寺台」古墳群とは異なった様相を示していることになる。この様相差が地域間のものなのか、遺跡間のものなのか、また様相差が何を意味するのか課題は大きい。ただ、現状では決して明瞭ではないが、武士遺跡の例を見ると8世紀前半までの古墳数は限定されていると言えるかもしれない。なお筆者は以前、上総では同時期の古墳の規模の差が目立つ例が多いと述べたことがあるが、武士遺跡や打越岱遺跡では大規模な古墳が先行して築かれており、外迎山遺跡でもその可能性があるため、ここで訂正しておきたい。

再び方墳の盛行 8世紀後半代になって造墓活動が行われたと思われる古墳群には土壙墓群が伴うことはあまりなく、8世紀前半から継続する古墳群を含めて、古墳数は爆発的に増加したとみられる。一般に「方形周溝（状）遺構」と呼ばれる小規模方墳の大半は8世紀後半から9世紀のはじめ頃に営まれたものと思われる。物井古墳群においても、小規模方墳だけで群を構成していた大割遺跡や千代田遺跡群V区で、僅かながら出土した土器の年代は8世紀後半を示していた。この段階は、物井古墳群や岩富古墳群で見たように、広範囲の分布を持つ古墳群

では、6～7世紀以上に複数の支群が分立して多くの古墳が造られる。群構成には、単独で造られるもの、2～3基の小群を形成するもの、2～3基の小群がさらに2～3集まったもの、多数群集するものなど多様な在り方があり、その差異は別に議論されなければならないが、古墳築造数の増加はとりもなおさず造墓主体の増加であり、前段階で土壙墓を営んでいた階層が、区画を持った小規模方墳を営むようになったと想定することができる。おそらくこの現象は、律令国家の東国支配が一応の安定をみた段階に、支配—被支配関係に組み込まれたことによって集団内の階層秩序が弛緩した顕れと考えることは何度も述べているとおりである。

土壙墓は、8世紀後半以降消失するわけではない。例えば、千葉市地藏山遺跡では5基の方墳と有溝土壙墓1基、有天井土壙墓2基、単独の火葬骨埋納施設1基が検出されているが、有天井土壙墓SK-051（甕2点を棺とした火葬あるいは改葬）については8世紀後葉以降、有溝土壙墓SK-049と火葬墓SK-015についてもおそらく同様の年代が与えられ、有天井土壙墓SK-050にいたっては9世紀末の土器が出土している。遺跡内には9世紀中頃の竪穴建物が営まれているが、9世紀末の遺構はなく、単なる混入の想定は難しい。地藏山遺跡では5基の方墳からは遺物が出土しておらず、方墳と土壙墓などとの関係を云々することは困難である。方墳が先行して築かれた可能性はあるが、もし方墳群と土壙墓群が並行して営まれたものだとすると、前段までの論旨からこれを解釈するのは難しくなる。しかしいずれにしても、有天井土壙墓などの土壙墓の形態がかなり遅れて残っていくことは確かなようであり、8世紀後半の方墳が盛行する段階にあっても、数は少ないながら造られていたことが考えられる。

区画墓の終焉 それでは古墳の築造が一般的に終焉する時期はどのように考えられるのであろうか。今回概観した諸遺跡のなかで、最も新しい時期の土器を出土したものは市原市武士遺跡SC-07とSC-18の2基で、時期は9世紀第2四半期である。該期の古墳からは遺物が出土しないことがむしろ通例であることから、それらの終焉時期を確定することは不可能には相違ないが、現在のところ9世紀後半代の土器を出土したものはなく、新たな古墳（区画墓）の築造は9世紀前半のうちに終了していると推定することができる。また9世紀前半の年代を示す遺物を出土した古墳も僅少であり、8世紀から9世紀の間では、古墳の築造のピークが8世紀後半にあることはほぼまちがいあるまい。9世紀前半になって古墳築造が終焉するとして、それがほぼ一斉に終了するのか、それとも遺跡あるいは小地域単位のかかなりのばらつきを含んで漸次終了するのか焦点となるが、9世紀前半の遺物を出土したものが少ないとすれば、9世紀になって漸次築かれなくなっていったように思える。しかし遺物を出土するものが前代に比較してさらに少ないという可能性もあって、その判断は至難と言えよう。一斉に終了するか否かでその現象に対する解釈が大きく異なってくるだけに残念である。

古墳（区画墓）が築かれなくなってからも区画を持たない墓が同じ群中に営まれていること

があるのはすでに述べた。土持台遺跡でそれは明瞭であるが、地藏山遺跡の9世紀末の有天井土壇墓も古墳築造終了後のものであろうし、外迎山遺跡でも9世紀代の火葬墓が古墳築造終了後の所産である可能性がある。その蓋然性が正当なものであるとするなら、墳墓としては区画の有無という差を持ちながら、墓域はそのまま継承していることになり、集団の墓域そのものに対する外部的、強権的な変化は認められないことになる。さらに土持台遺跡や外迎山遺跡では9世紀に入って間もなく区画墓から無区画墓へ移行したと仮定すれば、9世紀になっても古墳を造り続けた武士遺跡との差が生じることになり、古墳築造の終焉が一律のものでなかったとすることもできる。このように仮定の上に推論を重ねることは不可能ではないが、われわれが今なすべきことは事実関係のさらなる追及への努力ではあろう。

5. おわりに

以上、7世紀末以降の墳墓群に関するとりとめの考察を綴ってきた。資料的制約によって、個々の遺跡のなかでの子細な分析が不可能な現状においては、結局大まかな流れを示す雑駁な議論に終始せざるをえない。したがって細かい部分においては、将来より資料が充実した時には修正を余儀なくされるであろう。しかしここで筆者が最も強く主張したいことは、墳墓の性格にしても、墓域の構成にしても古墳時代後期の古墳群からの一貫した連続性を正しく認識し、その視点のもとに研究を進めるということである。近年になってもなお、弥生時代の「方形周溝墓」からの形態的な系統を強調して「古墳」からの一貫性をあまり考慮しない論調が見られるし、またそうでなくとも「古墳」とは区別すべきであるとする意見は数多い。8世紀以降の「方形周溝（状）遺構」を「古墳」と呼ぶべき理由は述べたことがあるが、最後に筆者がそこで記した一文を再びここに引用し、擱筆の語としたい。

「…重要なのは、なぜ古墳の造営が一部地域で残るのか、またそこには国家形成期を境にしていかなる変化が認められるのかが課題として求められるのであって、徒に『古墳』と区別することに努力を費やし、歴史を分断するのは科学的態度とは言えないのではないだろうか。」

註

- (1) 渡辺修一「補論4 『物井古墳群』の構造的把握に向けて」『四街道市内黒田遺跡群』（財）千葉県文化財センター 1991
- (2) 渡辺修一・他『四街道市御山遺跡（1）』（財）千葉県文化財センター 1994
- (3) 渡辺修一「VI 補論 1. 古代国家成立後の『古墳』」『千葉市荒久遺跡（3）』（財）千葉県文化財センター 1991

- (4) 金丸誠『佐倉市立山遺跡』（財）千葉県文化財センター 1983
- (5) 矢戸三男・他『佐倉市向山谷津・明代台・木戸場・古内遺跡』（財）千葉県文化財センター 1987
- (6) 藤崎芳樹・他『佐倉市大作遺跡』（財）千葉県文化財センター 1990
- (7) 山口典子・他『佐倉市栗野Ⅰ・Ⅱ遺跡』（財）千葉県文化財センター 1991
- (8) 渡辺修一・他『千葉市荒久遺跡（3）』（財）千葉県文化財センター 1991
- (9) 渡辺修一『千葉市地蔵山遺跡（1）』（財）千葉県文化財センター 1992
渡辺修一・他『千葉市地蔵山遺跡（2）』（財）千葉県文化財センター 1993
- (10) 田中新史「古墳時代終末期の地域色—東国の地下式土壌墓を中心として—」『古代探叢Ⅱ』早稲田大学出版部 1985
- (11) 山口典子は報文中で、ここで言う有天井土壌墓を「地下式土壌墓」と呼称している。これは田中新史（註10文献）に従った呼称である。筆者は有天井土壌墓の呼称に固執するわけではないが、田中の論考で「二段地下式構造の木棺墓」と「地下式土壌墓」がまぎらわしく、また地下式横穴とも峻別する必要があると考えるため、有天井土壌墓の呼称を用いている。この種の土壌墓の起源は古墳の周溝内土壌にあり、地下式横穴とは異なった系譜を持つものであることも理由の一つと言える。本稿で呼称する有溝土壌墓については、溝の方向によって横溝土壌墓、縦溝土壌墓等と呼ばれている。ところが筆者が註8文献で報告した土壌墓のなかには、縦溝と横溝が併存するものがあり、その例では前記のような呼び方は不可能である。そもそも縦溝と横溝は該種土壌墓の本質的な差異ではなく、有溝土壌墓の名で一括したほうがよいと考える。
- (12) 山口典子・他『佐倉市松向作遺跡』（財）千葉県文化財センター 1992
- (13) 大原正義『佐倉市向原遺跡』（財）千葉県文化財センター 1989
- (14) 清藤一順・他『佐倉市星谷津遺跡』（財）千葉県文化財センター 1978
- (15) 註5文献。
- (16) 註3文献。
- (17) 荒井世志紀・他「中山遺跡」『四街道市四街道南土地区画整理事業地内発掘調査報告書』（財）印旛郡市文化財センター 1987
- (18) 田川良・他『生谷』生谷遺跡調査団 1977
- (19) 千田幸生・大賀健「羽根戸遺跡」『四街道市吉岡遺跡群発掘調査報告書』四街道市吉岡遺跡群調査会 1986
- (20) 種田齊吾『兼坂遺跡』『京葉』（財）千葉県都市公社 1973
- (21) 神野信・笹生衛「武士遺跡におけるいわゆる「方形周溝遺構」について」『研究連絡誌』29（財）千葉県文化財センター 1990
- (22) 大村直『下鈴野遺跡』（財）市原市文化財センター 1987
- (23) 木對和紀『外迎山遺跡・唐沢遺跡・山見塚遺跡』（財）市原市文化財センター 1987
- (24) 「〈速報〉奉免上原台遺跡」『私たちの文化財』9（財）市原市文化財センター 1987
- (25) 小澤洋・他『打越岱遺跡』（財）君津郡市文化財センター 1989
- (26) 三浦和信『多古工業団地内遺跡群発掘調査報告書』（財）千葉県文化財センター 1986
- (27) 白井久美子・深沢克友「諏訪台古墳群の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会・上総国分寺台遺跡調査団 1981
白井久美子・永沼律朗「諏訪台古墳群の調査」『上総国分寺台発掘調査概報』市原市教育委員会・上総国分

寺台遺跡調査団 1982

『上総国分寺台発掘調査概要Ⅻ 諏訪台古墳群』 市原市教育委員会 1984

浅利幸一「天神台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和57・58年度』（財）市原市文化財センター 1985

田所真「諏訪台古墳群」『市原市文化財センター年報 昭和60年度』（財）市原市文化財センター 1986

浅利幸一「諏訪台古墳群」『市原市文化財センター年報 昭和61年度』（財）市原市文化財センター 1988

木對和紀「諏訪台遺跡」『市原市文化財センター年報 昭和62年度』（財）市原市文化財センター 1989

(28) 菊池真太郎・他『千葉市誉田県立コロニー内遺跡』（財）千葉県文化財センター 1976

(29) 柴田龍司・他『千葉市辺田山谷遺跡』（財）千葉県文化財センター 1986

（千葉県教育庁生涯学習部文化課）